

元気のヒント

＜36＞



けんざき 監崎 孝一郎

徳島大学病院呼吸器外科

悪性胸膜中皮腫は、肺胸膜に発生する予後不良の腫瘍です。ほとんどの症例が、近年話題となったアスベスト（石綿）の暴露に関連しています。

石綿は、繊維性の天然鉱物で「せきめん」や「いしわた」と呼ばれています。高度成長期には、ビル建築現場などで頻繁に、保温断熱の目的で石綿を使用していました。繊維が極めて細いため、吹き付け石綿などの除去において適切な措置を行わないと飛散し、人が吸入する恐れがあります。

このため、日本では1967

悪性胸膜中皮腫

5年に吹き付け石綿の使用が禁止されました。しかし石綿自体はその後、自動車や鉄道車両のブレーキパッド、防音材などには使用されてきました。2004年、石綿を1%以上含む製品の出荷が原則禁止になり、06年にはこの基準が0.1%に改定されました。

同年に「石綿による健康被害の救済に関する法律」が施行され、以来、行政の対応が活発化しています。労働基準監督署によって業務上疾病と認定されると、労災保険での治療も可能です。詳しくは、独立行政法人環境再生保全機構のホームページ（<http://www.erca.go.jp/asbestos/>）をご覧ください。

石綿は、石綿肺や肺がん、中皮腫の原因とされ、特に悪

潜伏期間は30～40年

性胸膜中皮腫は、30～40年という長い潜伏期間の後に発症するといわれており、若い時期に吸い込んだ人ほど中皮腫になりやすいことが知られています。しかし、どれくらい石綿を吸えば中皮腫になるかは明らかではありません。

近年、中皮腫による死亡者数は年々増加しています。08年の死亡者は、全国で1700人であり、30年には年間約3000人が死亡するとも予想されています（「グラフ参照」）。

悪性胸膜中皮腫は、大きく上皮型、二相型、肉腫型に分けられ、上皮型が最も多いです。しかし、早期診断は難しく、良性の「胸膜炎」と誤認されることもしばしばです。

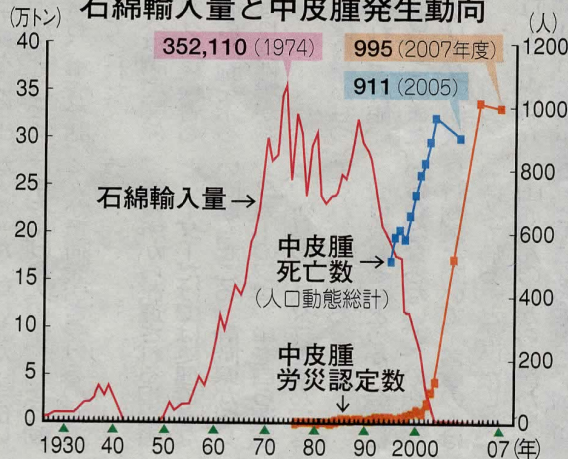
胸腔にたまった胸水の一部を穿刺採取し、顕微鏡で細胞を観察する「胸水細胞診」や、採血によって血液中の物質を調べる「血清メソリン測定（現時点では保険適用外）」では確定診断が困難で、全身麻酔で胸膜と肺の一

部を切除し、顕微鏡で観察する「胸腔鏡下胸膜肺生検」を必要とする場合が多く見られます。ただでさえ完治困難な中皮腫の死亡率が高い一因がここにあります。

根治手術は、上皮型・二相型のリンパ節転移がない状態に適応が限られていて、しかも抗がん剤と放射線療法を併用しなくてはなりません。また手術法は、高リスクの「片側胸膜肺全摘術」が一般的で

ます。過去にアスベストにやけどした可能性のある方は、一度専門医の診察をお勧めいたします。

石綿輸入量と中皮腫発生動向



大半が石綿暴露に関連